

## 埼玉県立浦和図書館の歴史

埼玉県立浦和図書館の前身は、埼玉県教育会立埼玉図書館で大正11年北足立郡役所内（現在のさいたま市浦和区）に開館しました。大正14年に、現在地にあった埼玉女子師範学校（鳳翔閣）を改装し、移転をしました。昭和35年、現在の建物となる鉄筋コンクリート造、地上3階地下1階の新館が落成しました。開館から90余年、平成27年3月31日をもって、その歴史を閉じることとなりました。



県立埼玉図書館（鳳翔閣 昭和9年）

## 私と埼玉県立浦和図書館

### 埼玉県立浦和図書館の思い出

杏澤内科医院 杏澤 菊雄

小学生の頃、ひ弱な私は図書館で遊んでいることが多かった。初めは女子師範の黒い木造の建物で漫画等の本も多く、図書館の中で元気に駆け回る子供も沢山いた。図書館の敷地内には灌木が割と多く生えていた。昭和30年当時はベビーブームで図書館の近くの中央公園は子供であふれていた。図書館の南側は現在の埼玉会館敷地で当時は二つの建物があった。一つはボーイスカウトなどの活動を支える社会教育団体の建物で、もう一つは、劇場があり分厚いドアがあった。図書館が今の形になってからは、1階の子供室には受付の女性がいた。子供達は学校からもらった証明書を出すと図書館の利用者番号を教えられ、その番号を申し出て本を帯出させてもらった。本を借りると、本には期限を書き込む票が付けてあった。私は子供向けの本を館内で読んでいた。あとは歴史の本等だったかな？3階の書籍を利用する頃には、図書館利用者カードを3枚もらった。そのカード入れに図書カードを入れ、本を借り出した。磁気カードを使うようになったのはいつだったか、CD等も借りていた。図書館の北側は今もあの頃と変わらず狭い道があり、坂下通りまで通じている。



こども室（昭和35年頃）

### 思い出の県立浦和図書館

旧職員 福島(旧姓鈴木) 久美子



3階閲覧室（昭和35年頃）

私が県立図書館を退職してから半世紀以上も経ちました。私は文部省図書館職員養成所を卒業して昭和32年に県立図書館に就職しました。在職は僅か6年でしたがその間に古い建物から新館への移転を経験しました。旧館は明治11年建築の木造の洋館です。外観は美しいのですが内部は不便で全体に暗く、床は板張り、特に女性にとってはトイレ事情が酷く、戦時中の小学校と同じ形式でした。図書館には小使いさん夫婦もいました。2階のバルコニーはとても立派な造りでした。窓は上下に開閉する西洋風の造りで現存していたら文化財指定になったのでは…。昭和34年改築のため越した先は旧浦和警察署で広い一部屋で皆が仕事をしていました。昭和35年5月に

新館落成式が挙行されました。新館に移って職員も増え、明るい職場になりました。しかし、当時は何でも手作業です。図書の受入や貸出等一つひとつ間違いないように手書きをしていました。今では各市町村に図書館がありますが、当時は県立図書館館外奉仕課の移動図書館車が秩父の山の方まで巡回していました。昭和30年代は高度成長期、昭和39年の東京五輪を控え、道路整備に加え戦争で焼失した城や寺院も多く復元されています。新図書館建設もちょうどこの時期に建設されました。現在、私は自宅から歩いて5分の市立図書館をよく利用しています。歴史ある県立浦和図書館が閉館と聞き、大変寂しく感じました。思い出の多い場所にぜひ再建を望んでいます。



県立図書館新館（昭和35年）

### 県立浦和図書館長時代を振り返って

第26代館長 村田 文生

私が県立浦和図書館長であったのは平成5年度から9年度の5年間である。世の中はバブル景気の終焉で緊縮モードであった。図書館ではコンピュータ導入など機械化が求められていた頃で何かと心せかされるものがあった。一方で、予算(特に資料費)の縮減等財政事情は厳しく、頭の痛い日々が続いていたことを思い出す。また、県民の知る権利を全国で2番目に条例化した埼玉県であったことから本館に対しても情報公開請求をされる方々が多くいた。併せて施設の狭隘化・老朽化の対応など館長として決断を求められることが山積していた。さらに、県立浦和・熊谷・川越・久喜図書館の4館が専門分野を分担し始めた時期であった。その他、協力車の効率的運行、県内各大学図書館との連携によって県民への図書館サービスの充実にも腐心していた。その後、埼玉県立社会教育施設再編整備計画により川越図書館が閉館になり、県立図書館3館体制でのサービス再構築となった。中央図書館構想の出現の声も高まっていった。平成23年3月に東日本大震災があり、公共施設の耐震性が問われるようになり、県立浦和図書館は平成26年度末をもって閉館となる運びになったことは淋しい限りである。春夏秋冬の季節感を演出してくれた「けやきの木」とともに、その労苦に耐えた図書館やこのような環境の中で、懸命に県民への図書館サービスに尽力してきた職員各位には多大の謝意を表したい思いである。

## 埼玉県立浦和図書館のお宝



武蔵一国之図（埼玉県立浦和図書館所蔵）

埼玉県立浦和図書館蔵「武蔵一国之図」(ムサシイッコクノズ)はさいたま文学館の企画展準備のため関係資料を調査していた白井哲哉学芸員(現筑波大学教授)が平成20年1月に発見しました。この絵図は昭和39年に図書館が購入したものです。当時は絵図の調査研究が進展する前であったため、その価値はわかりませんでした。その後の調査で絵図は江戸初期(寛永10年(1633))に作成された国絵図「日本六拾余州国々切絵図 武蔵国」(秋田県公文書館蔵)の略図集の写しであることが確認できました。絵図の書写は18世紀前半。そのため、後年の追加記載が見られます。武蔵国の村を描いた最も古い姿を伝えており、埼玉県の歴史や地理を考える上で重要な意味を持ちます。

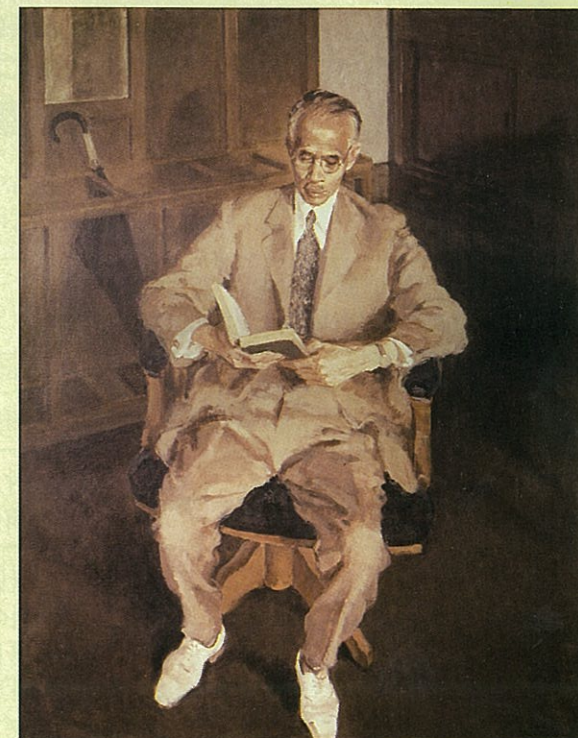
(参考文献「絵図で見る川越」)

※なお、この絵図は県立図書館ウェブサイトのデジタルライブラリーで画像を公開しています。

## 埼玉県立浦和図書館 素敵なエピソード

埼玉県立近代美術館に所蔵されている「老図書館長Tさんの像」は、画家渡邊武夫先生が昭和16年に描いたもので、第4回新文展で特選になった作品です。この絵について、当時の美術雑誌「季刊美術」で画家・美術評論家石井柏亭氏は「惣当な出来である。日本の画家は兎角人物と背景との関係に就ての研究が足りないのであるが、此肖像ではそれが相當に注意されて居る。」と評しています。この絵を描いた時、渡邊先生は25歳、大宮高女(現在の埼玉県立大宮高等学校)の美術教師でした。御自身の資料によると、この作品のモデルとなったのは、埼玉県立図書館職員の田口慎二氏であったとされます。田口氏は大正13年3月31日から昭和17年5月31日まで司書として本館に勤務していました。作品が描かれた頃、館長は県の学務課長が兼任していたので、田口氏が事実上の館長であったといえます。二人の出会いは渡邊先生が埼玉県師範学校附属小学校の頃でした。渡邊先生は図書館主催の童話会に毎回出席し、いつも面白い話をしてくれたのが田口氏であったと言っています。この作品は二人の間に築き上げられてきた長年の親交から生まれた作品でした。一見、強面な人物に見えますが温かみを感じたのはこんなエピソードがあったからなのでしょう。

(参考文献「渡邊武夫画集」「埼玉県立浦和図書館50年誌」)



「老図書館長Tさんの像」渡邊武夫（埼玉県立近代美術館蔵）

## 埼玉県立浦和図書館が映画のロケ地に！

現在の埼玉県立浦和図書館の建物は昭和35年に建てられたものです。その後、大きな改修工事を行っていないため、建設当時の「様子」を彷彿とさせる内装・外装になっています。本館が映画「北のカナリアたち」などの撮影場所として使われてきたことを、皆さん御存知でしたか？ 昨年の夏には、現在公開中の映画「ソロモンの偽証」のロケ現場になりました。ロケ当日は、早朝から大勢の映画スタッフが当館に集まり、司書職員室をあっという間に昭和の警察署に模様替えをして撮影に入りました。スタッフ一人ひとりの緊張した撮影は夜遅くまで続きました。県立浦和図書館のある休館日のひとコマです。



撮影風景（協力：(株)松竹撮影所）